

論文の和文要旨	
題目	日本語の母語場面と接触場面における共同発話文の総合的研究 ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー
氏名	林（木林）理恵
<p>本研究で分析の対象とした共同発話文とは、話者 A「通勤時間はかかるけれども、電車で座れるという意味では…」話者 B「楽ではいらっしゃるわけですね」というように、会話において 2 人以上の話者が一つの文を作る現象である。先行研究において、共同発話文は基本的に協調的な言語行動であると捉えられているが、その機能は網羅的に挙げられていることが多く、体系的に捉えられているとはいえない。また、言語修得における役割が指摘される一方で、母語話者同士の会話を分析した研究が多い。</p> <p>本研究では、共同発話文が日本語会話の相互作用においてどのような働きをしているのかを、定量的・定性的双方から総合的に分析し、ディスコース・ポライトネス理論（宇佐美 1998a、2002、2008a）を用いて解釈することで、共同発話文を体系的に捉えることを試みた。また、母語場面と接触場面両方のデータを用い、言語教育において共同発話文が果たす役割を考察した。</p> <p>本論文は、先行研究の概観、及び本研究で用いる方法論と背景理論の説明（1 章）、実証的研究（2 章・3 章・4 章）、実証的研究に基づく考察（5 章・6 章・7 章）の 3 部から構成されている。以下に、各章の概要を述べる。</p> <p>第 1 章では、共同発話文に関する先行研究の観点を整理し、本研究で用いる方法論（総合的会話分析）、及び背景理論（ディスコース・ポライトネス理論）を説明した。</p> <p>共同発話文は、会話の中で統語的なつながりが起こることから、統語論に話し言葉という新たな観点を取り入れるものとして興味を持たれ、言語の構造を明らかにするための有意義な現象として注目された。また、相互作用が研究され始めたころの語用論においては、人間のコミュニケーションは「文（発話）」を互いに発して意図を伝達し合うものだと思われていたが、共同発話文によって、発話は話し始めた話者だけのものではないこと、文や複合的なターンが相互作用の中で作り上げられることがわかり、説明を助ける・共感的に理解を示すといった共同発話文の機能が研究されてきた。第一言語修得の観点からも、共同発話文は子どもの言語習得を促進する要素として重視されている。そして、医療コミュニケーションの研究では、共同発話文は医者が患者の発話を助け、患者とのコミュニケーションを円滑に進めるものとして捉えられている。</p> <p>本章では、共同発話文の機能を網羅的に挙げるにとどまっている先行研究が多いことを指摘し、共同発話文を体系的に捉えるためには、当該発話内でのやりとりに注目するというローカルな観点からの分析だけではなく、話者の年齢・社会的地位といった当該会話外</p>	

の要因を考慮したり、「談話の基本状態」を捉えた上で分析対象を考察したりするといったグローバルな観点からの分析が必要であることを述べ、本研究で用いる総合的会話分析(宇佐美 2008a)の手法について説明した。

また、相互作用を解釈するための理論として、ポライトネス理論 (Brown&Levinson1987) 及びディスコース・ポライトネス理論 (以下、DP 理論) を用いることを説明した。それは、共同発話文は相手の発話に対する理解を示すという性質を持っており、ポジティブ・ポライトネスであると解釈される (宇佐美 2006a) こと、DP 理論は総合的会話分析の手法と関係が深いこと、また、先行話者の発話意図を後行話者が見積もるという行為を考察するためには、DP 理論における「見積もり差」という概念を用いることが適当だと思われるからである。

さらに、相互作用における言語学習観の流れを概観し、DP 理論の鍵概念である「談話の基本状態」は、状況論的アプローチにおける「現場の理解」や正統的周辺参加 (Lave & Wenger1991) における「実践共同体」という概念と重なる部分があることを説明し、DP 理論を用いて共同発話文を考察することで、言語教育への示唆も得られることを述べた。

2章では、母語場面、及び日本人と中級話者との接触場面の2種類のデータを使用し、各場面における共同発話文の生起率、先行発話と後行発話のつながり方、後行発話のタイプと形式を分析した。どちらの場面も初対面の会話で、話者は、同世代の女性同士(学生・社会人)とした。結果は以下の通りである。①共同発話文の生起率は、母語場面では1.3%、接触場面では1.0%である。②日本語母語話者は、母語話者より中級話者に対して「質問」形式の後行発話を行うことが多い。③共同発話文生起の際には、先行発話と後行発話のつながりがスムーズな場合が多く、後行発話のタイプに終了型が多い。この定量的な結果を Sacks (1992) の議論を用いて解釈すると、共同発話文は相手の言いたいことを理解したことを示すという基本的な性質を持っていると言える。④母語話者が中級話者に対して「質問」の形式で後行発話を発するとき、中級話者の先行発話には「言葉探し」が見られた。このような先行発話の状況から、母語話者が中級話者に対して行う「質問」形式の後行発話は、「助け船」の役割を果たしていると考えられる。

3章では、日本語母語話者は中級話者に対して「質問」形式の後行発話を行うことが多い、という2章の結果に着目し、先行発話における「言葉探し」と後行発話の「質問」の形式との結びつきに焦点を当てて分析した。データは、母語場面と、日本人と中級話者との接触場面、日本人と超級話者との接触場面の3種類である。母語場面と、日本人と中級話者との接触場面で見られた相違点が、会話参加者の日本語に対する知識からくるものならば、日本語母語話者と超級日本語話者の会話は、日本語母語話者同士の会話と変わらない特徴を持つと考え、日本人と超級話者との接触場面を加えた。

結果は以下の通りである。①共同発話文の生起率は、母語場面2.16%、日本人と中級話者との接触場面1.89%、日本人と超級話者との接触場面1.53%であった。②中級話者の先行発話には「言葉探し」が多く見られた。しかし、先行発話に「言葉探し」があるときに後行発話が「質問」形式かどうか、ということに傾向は見られなかった。③後行発話が質問形式になったときには、相手の発話内容に対する理解の難しさがあつたり、「質問一応答」

という流れの中で共同発話文が起こっている場合が多かったりする、という傾向がある。

4章では、3章で会話データを増やしたことによって、先行発話の発話意図と後行発話の関連性が薄く、「相手の言いたいことを理解したことを示す」タイプとは異なる共同発話文が見られたことに着目し、先行発話の発話意図と後行発話の関連性について分析した。データは、母語場面と、日本人と中級話者との接触場面、日本人と超級話者との接触場面の3種類である。

まず、共同発話文の8割以上が先行発話の発話意図と後行発話の関係が強いことを示し、両者の関係が弱い共同発話文にはどのようなものがあるかを考察した。それらは、①発話文として終了した先行発話に後行発話を続けたもの、②先行話者が、後行発話を受けて先行発話に続く発話を行わなかったもの、③先行発話より前に質問があり、その質問に答える形で後行発話が起こったもの、であった。共同発話文が起こった文脈から、先行発話の発話意図と後行発話の関係が弱い共同発話文は、会話をスムーズに進行させようとしていると解釈できる場合が多かった。宇佐美(2006a)では、「相手の発話に対して理解を示す」という共同発話文の機能から、共同発話文を日本語会話におけるポジティブ・ポライトネスだと位置づけている。一方、先行発話の発話意図と後行発話の関係が弱く、「相手の言いたいことを理解したことを示す」タイプとは異なる共同発話文も、会話を円滑に進めるために発せられており、タイプが異なっても、ポジティブ・フェイスを満たすポジティブ・ポライトネスと捉えられるのではないかと考察した。

5章では、2章から4章の分析結果を考察し、3種類の場面ごとの共同発話文の特徴、日本語中級話者の発話の傾向、日本語超級話者の発話の傾向をまとめた。定量的な分析から、初対面・同世代の女性同士の会話、という条件では、共同発話文の生起率は1~2%程度であるといえる。また、共同発話文は基本的に「相手の言いたいことを理解したことを示す」ものであること、あるいは会話を円滑に進めるために発せられるものであることから、ポジティブ・フェイスを満たすポジティブ・ポライトネスと捉えられることを示した。

6章では、DP理論の観点から考察することにより、共同発話文を「会話の基本状態」から離脱する有標行動として位置づけ、3種類のポライトネス効果（プラス効果、ニュートラル効果、マイナス効果）の分析を行った。

初対面・同世代の女性同士の会話において、共同発話文の生起率は1~2%程度である。ここから、このような日本語会話においては、自分の発話を相手の発話に文法的に続くようにデザインすることがあまり起きず、共同発話文ではない発話が「無標行動」であり「無標ポライトネス」であると解釈できる。そのため、共同発話文の生起は基本状態から離脱することであり「有標行動」となる。つまり、DP理論の観点から、共同発話文は会話においてポライトネス効果を生み出す有標行動であると言える。

ポライトネス効果は、フェイス侵害度や「談話の基本状態」について、話し手と聞き手の見積もり差が許容範囲内であるときはプラス効果あるいはニュートラル効果、それが許容範囲を超えたときはマイナス効果を生むとされている。共同発話文の場合は、フェイス侵害度や「談話の基本状態」の他に、後行発話の内容が先行発話の発話意図と関係があっ

たか、ということも見積もりの対象として考えられる。

共同発話文生起の際に笑いが起こる、といったプラス効果は、母語場面・日本人と中級話者との接触場面・日本人と超級話者との接触場面の全てにおいて見られた。

また、ニュートラル効果も全ての場面で見られ、先行研究で指摘されている独り言や言語的談話効果の他に、文の方向性を示す発話やあいづちもニュートラル効果に含まれるのではないかと考察した。

後行発話の内容に対して話し手と聞き手の理解に差があり、マイナス効果が生まれた談話は、日本人と中級話者との接触場面で見られた。DP理論では、ポライトネス効果は「話し手と聞き手の見積もり差」によって生まれ、一つの連続線上に分布するとされている。明らかに失礼だと感じられる振る舞いばかりでなく、雑談のような会話におけるちょっとした行き違いもマイナス効果として位置づけることができることを、実際のデータから示した。共同発話文が、その生起率の低さにもかかわらず様々な観点から多くの研究がなされてきたのは、ポライトネス効果を生む「有標行動」である、という相互作用上の重要な役割を果たしているために注目されたのではないかと考えられる。DP理論の観点から見て初めて、このような共同発話文の特殊さを解釈することができたと考える。また、DP理論に対しては、共同発話文の観点から、実証的なデータと解釈のありようを提供することができた。

7章では、全体のまとめと、DP理論の観点から共同発話文が言語教育に示唆することを述べた。

DP理論の観点から、第二言語における円滑なコミュニケーションの方法を身につけるということは、目標言語における様々な活動の型における「談話の基本状態」や「談話を構成する諸要素の基本状態」を適切に見積もることができるようになるということであり、また、基本状態からの離脱（有標行動）が適切に行えるようになるということである。本研究では、共同発話文生起の際に生まれたポライトネス効果を分析・考察することによって、共同発話文という観点から、日本語会話における適切な有標行動を示すことができた。

会話において共同発話文が起こることは少ないが、共同発話文は、日本語会話における有標行動という重要な機能を持っている。従来の言語教育においては、学習者には「基本状態」のような、学習項目の典型的なモデルが示される場合が多かった。しかし、自然な言語運用には典型的ではない行動がつきものであり、基本状態から離脱する行為を示すことも大切である。まして、共同発話文のような有標行動は、ポライトネス効果をもたらす重要な要素であることから、有標行動である共同発話文を分析し学習者に提示していくことは、自然な言語運用を学ぶ上で欠かせないことを述べた。